校異源氏物語・ゑあはせ

前斎宮の御まいりの事中宮の御心にいれてもよをしきこえ給ふこまかなる御とふらひまてとりたてたる御うしろみもなしとおほしやれと大とのは院にきこしめさむ事をはゝかり給て二条の院にわたしたてまつらむことをもこのたひはおほしとまりてたゝしらすかほにもてなし給へれとおほかたの事ともはとりもちておやめきゝこえ給ふ院はいとくちおしくおほしめせと人わろけれは御せうそこなとたえにたるをその日になりてえならぬ御よそひとも御くしのはこうちみたれのはこかうこのはこともよのつねならすくさ　くの御たきものともくぬえかう又なきさまに百ふのほかをおほくすきにほふまて心ことにとゝのへさせ給へりおとゝみ給もせんにとかねてよりやおほしまうけゝむいとわさとかましかむめりとのもわたり給へるほとにてかくなむと女へたう御覧せさすたゝ御くしのはこのかたつかたをみ給につきせすこまかになまめきてめつらしきさまなりさしくしのはこの心はに

わかれ路にそへしをくしをかことにてはるけき中と神やいさめしおとゝこれを御らんしつけておほしめくらすにいとかたしけなくいとをしくてわか御心のならひあやにくなる身をつみてかのくたり給しほと御心におもほしけんことかうとしへてかへりたまひてその御心さしをもとけ給へき程にかゝるたかひめのあるをいかにおほすらむ御くらゐをさりものしつかにて世をうらめしとやおほすらむなと我になりて心うこくへきふしかなとおほしつゝけ給にいとおしくなにゝかくあなかちなる事を思はしめて心くるしくおもほしなやますらむつらしとも思ひきこえしかと又なつかしうあはれなる御心はへをなと思みたれ給てとはかりうちなかめ給へりこの御返はいかやうにかきこえさせ給らむ又御せうそこもいかゝなときこえ給へといとかたわらいたけれは御文はえひきいてす宮はなやましけにおもほして御返いとものうくしたまへときこえ給はさらむもいとなさけなくかたしけなかるへしと人　くそゝのかしわつらひきこゆるけはひをきゝ給ていとあるましき御事なりしるしはかりきこえさせ給へときこえ給もいとはつかしけれといにしへおほしいつるにいとなまめきゝよらにていみしうなき給し御さまをそこはかとなくあはれとみたてまつり給ひし御おさな心もた

ゝいまの事とおほゆるにこみやすむ所の御ことなとかきつらねあはれにおほされてたゝかく

わかるとてはるかにいひしひとこともかへりてものはいまそかなしきとはかりやありけむ御つかひのろくしな　くに給はすおとゝは御返をいとゆかしうおほせとえきこえ給はす院の御ありさまは女にてみたてまつらまほしきをこの御けはひもにけなからすいとよき御あはひなめるをうちはまたいといはけなくおはしますめるにかくひきたかへきこゆるを人しれすものしとやおほすらむなとにくき事をさへおほしやりてむねつふれ給へとけふになりておほしとゝむへき事にしあらねはことゝもあるへきさまにのたまひをきてむつましうおほすすりのさい将をくはしくつかうまつるへくの給て内にまいり給ぬうけはりたるおやさまにはきこしめされしと院をつゝみきこえ給て御とふらひはかりとみせ給へりよき女房なとはもとよりおほかる宮なれはさとかちなりしもまいりつとひていとになくけはひあらまほしあはれおはせましかはいかにかひありておほしいたつかましとむかしの御心さまおほしいつるにおほかたのよにつけてはおしうあたらしかりし人の御ありさまそやさこそえあらぬものなりけれよしありしかたはなをすくれてものゝおりことに思ひいてきこえ給ふ中宮もうちにそおはしましけるうへはめつらしき人まいり給ときこしめしけれはいとうつくしう御心つかひしておはしますほとよりはいみしうされおとなひ給へり宮もかくはつかしき人まいり給を御心つかひしてみえたてまつらせ給へときこえ給けり人しれすおとなははつかしうやあらむとおほしけるをいたうよふけてまうのほり給へりいとつゝましけにおほとかにてさゝやかにあえかなるけはひのしたまへれはいとおかしとおほしけりこき殿には御らむしつきたれはむつましうあはれに心やすくおもほしこれは人さまもいたうしめりはつかしけにおとゝの御もてなしもやむ事なくよそほしけれはあなつりにくゝおほされて御とのゐなとはひとしくしまへとうちとけたる御わらはあそひにひるなとわたらせ給ことはあなたかちにおはします権中納言は思心ありてきこえ給けるにかくまいり給ひて御むすめにきしろふさまにてさふらひ給をかたかたにやすからすおほすへし院にはかのくしのはこの御返御らんせしにつけても御心はなれかたかりけりそのころおとゝのまいり給へるに御物かたりこまやかなりことのついてに斎宮のくたり給し事さき　くもの給いつれはきこえいてたまひてさ思ふ心なむありしなとはえあらはし給はすおとゝもかゝる御けしきゝゝかほにはあらてたゝいかかおほしたるとゆかしさにとかうかの御事をの給ひいつるにあはれなる御けしきあさ

はかならすみゆれはいと　くおしくおほすめてたしとおもほしゝみにける御かたちいかやうなるおかしさにかとゆかしう思ひきこえ給へとさらにえみたてまつり給はぬをねたうおもほすいとをもりかにて夢にもいははけたる御ふるまひなとのあらはこそをのつからほのみえ給ふついてもあらめ心にくき御けはひのみふかさまされはみたてまつり給ふまゝにいとあらまほしとおもひきこえ給へりかくすきまなくてふたところさふらひ給へは兵部卿宮すか　くともえおもほしたゝすみかとをとなひ給ひなはさりともえおもほしすてしとそまちすくし給ふた所の御おほえともとり　くにいとみ給へりうへはよろつの事にすくれてゐをけうある物におほしたりたてゝこのませ給へはにやになくかゝせ給斎宮の女御いとおかしうかゝせ給へけれはこれに御心うつりてわたらせ給つゝかきかよはさせ給殿上のわかき人　くもこの事まねふをは御心とゝめておかしきものにおもほしたれはましておかしけなる人の心はへあるさまにまほならすかきすさひなまめかしうそひふしてとかくふてうちやすらひ給へる御さまらうたけさに御心しみていとしけうわたらせ給てありしよりけに御おもひまされるを権中納言きゝ給てあくまてかと　くしくいまめきたまへる御心にて我人におとりなむやとおほしはけみてすくれたる上すともをめしとりていみしくいましめて又なきさまなるゐともをになきかみともにかきあつめさせ給ものかたりゐこそ心はえみえて見所あるものなれとておもしろく心はへあるかきりをえりつゝかゝせ給れいの月なみのゐもみなれぬさまにことの葉をかきつゝけて御らんせさせ給わさとおかしうしたれは又こなたにてもこれをこらむするに心やすくもとりいて給はすいといたくひめてこの御かたへもてわたらせ給をおしみらうしたまへはおとゝきゝたまひて猶権中納言のみ心はへのわか　くしさこそあらたまりかたかめれなとわらひ給あなかちにかくして心やすくも御らんせさせすなやましきこゆるいとめさましやこたいの御ゐともの侍るまいらせむとそうし給てとのにふるきもあたらしきもゐともいりたる御すしともひらかせ給て女君ともろともにいまめかしきはそれ　くとえりとゝのへさせ給長恨歌王昭君なとやうなるゐはおもしろくあはれなれとことのいみあるはこたみはたてまつらしとえりとゝめ給ふかのたひの御日記の箱をもとりいてさせ給てこのついてにそ女君にもみせたてまつり給ひける御心ふかくしらていまみむ人たにすこしもの思ひしらむ人は涙おしむましくあはれなりまいてわすれかたくそのよの夢をおほしさますおりなき御心とともにはとりかへしかなしうおほしいてらるいまゝてみせ給はさりけるうらみをそきこえ給ける

ひとりゐてなけきしよりはあまのすむかたをかくてそみるへかりけるおほつかなさはなくさみなましものをとの給いとあはれとおほして

うきめみしそのおりよりもけふはまたすきにしかたにかへる涙か中宮はかりにはみせたてまつるへきものなりかたはなるましき一てうつゝさすかにうら〳〵のありさまさやかにみえたるをえり給ふついてにもかのあかしのいゑゐそまついかにとおほしやらぬ時のまなきかう絵ともあつめらるときゝ給て権中納言いと心をつくしてちくへうしひものかさりいよ〳〵とゝのへ給ふやよいの十日のほとなれは空もうらゝかにて人の心ものひものおもしろきおりなるにうちわたりもせちゑとものひまなれはたゝかやうの事ともにて御方〳〵くらし給ふをおなしくは御らむし所もまさりぬへくてたてまつらむの御心つきていとわさとあつめまいらせ給へりこなたかなたとさま〳〵におほかりものかたりゑはこまやかになつかしさまさるめるをむめつほの御かたはいにしへのものかたりなたかくゆえあるかきりこき殿はそのころよにめつらしくおかしきかきりをゑりかゝせ給へれはうちみるめのいまめかしきはなやかさはいとこよなくまされりうへの女坊なともよしあるかきりこれはかれはなとさためあへるをこのころの事にすめり中宮もまいらせ給へるころにてかた〳〵こらむしすてかたくおもほす事なれは御をこなひもをこたりつゝ御らむすこの人〳〵のとり〳〵にろむするをきこしめしてひたりみきとかたはかたせ給ふむめつほの御かたにはへいないしのすけ侍従の内侍少将の命婦右には大弐の内侍のすけ中将の命婦兵衛の命婦をたゝいまは心にくきいうそくともにて心〳〵にあらそふくちつきともをおかしときこしめしてまつものかたりのいてきはしめのおやなるたけとりのおきなにうつほのとしかけをあはせてあらそふなよたけのよゝにふりにけることおかしきふしもなけれとかくやひめのこの世のにこりにもけかれすはるかに思ひのほれる契たかく神世の事なめれはあさはかなる女めをよはぬならむかしといふみきはかくやひめののほりけむ雲井はけにおよはぬことなれはたれもしりかたしこのよの契はたけの中にむすひけれはくたれる人のことゝこそはみゆめれひとついゑのうちはてらしけめともゝしきのかしこき御ひかりにはならはすなりにけりあへのおほしかちゝのこかねをすてゝひねすみの思かた時にきえたるもいとあへなしくらもちのみこのまことのほうらいのふかき心もしりなからいつはりてたまのえたにきすをつけたるをあやまちとなすゑはこせのあふみてはきのつらゆきかけりかむやかみにからのきをはいしてあかむらさきのへうしたむのちくよのつねのよそひなりとしかけはゝけしき浪かせにおほゝれしらぬ

くにゝはなたれしかと猶さしてゆきける方の心さしもかなひてつゐに人のみかとにもわか国にもありかたきさえのほとをひろめなをのこしけるふるき心をいふにゑのさまもゝろこしとひのもとゝをとりならへておもしろき事とも猶ならひなしといふしろきしきしあをきへうしきなる玉のちくなり絵はつねのりてはみち風なれはいまめかしうおかしけにめもかゝやくまてみゆみきはそのことはりなしつきに伊勢物かたりに上三位をあはせてまたさためやらすこれもみきはおもしろくにきわゝしくうちわたりよりうちはしめちかき世のありさまをかきたるはおかしう見所まさるへいないし

いせのうみのふかき心をたとらすてふりにしあとゝなみやけつへきよのつねのあた事のひきつくろひかされるにをされてなりひらか名をやくたすへきとあらそひかねたり右のすけ

雲のうへに思ひのほれるこゝろにはちいろのそこもはるかにそみる兵衛の大君の心たかさはけにすてかたけれとさい五中将のなをはえくたさしとの給はせて宮

みるめこそうらふりぬらめとしへにしいせをのあまのなをやしつめむかやうの女ことにてみたりかはしくあらそふに一まきにことのはをつくしてえもいひやらすたゝあさはかなるわか人ともはしにかへりゆかしかれとうへのも宮のもかたはしをたにえみすいといたうひめさせ給おとゝまいりたまひてかくとり

くにあらそひさはく心はへともおかしくおほしておなしくは御前にてこのかちまけさためむとのたまひなりぬかゝる事もやとかねておほしけれは中にもことなるはゑりとゝめ給へるにかのすまあかしのふたまきはおほす所ありてとりませさせ給へり中納言もその御心おとらすこのころのよにはたゝかくおもしろきかみゑをとゝのふることをあめのしたいとなみたりいまあらためかゝむ事はほいなき事なりたゝありけむかきりをこそとのたまへと中納言は人にもみせてわりなきまとをあけてかゝせ給けるを院にもかゝる事きかせ給てむめつほに御ゑともたてまつらせ給へりとしのうちのせちゑとものおもしろくけふあるをむかしの上すとものとり　くにかけるにえむきの御てつから事のこゝろかゝせ給へるに又わか御よの事もかゝせ給へるまきにかの斎宮のくたり給しひの大こくてんのきしき御心にしみておほしけれはかくへきやうくはしくおほせられてきむもちかつかうまつれるかいといみしきをたてまつらせ給へりえんにすきたるちむのはこにおなしき心はのさまなといといまめかし御せうそこはたゝことはにて院のてんしやうにさふらふさこむの中将を御つかひにてありかの大こくて

んの御こしよせたる所のかう　くしきに
　みこそかくしめのほかなれそのかみの心のうちをわすれしもせすとのみあ
りきこえ給はさらむもいとかたしけなけれはくるしうおほしなからむかしの御
かむさしのはしをいさゝかおりて
　しめのうちはむかしにあらぬこゝちして神よの事もいまそ恋しきとてはな
たのからのかみにつゝみてまいらせ給御つかひのろくなといとなまめかし院の
みかと御らんするにかきりなくあはれとおほすにそありし世をとりかへさまほ
しくおもほしけるおとゝをもつらしとおもひきこえさせ給けんかしすきにしか
たの御むくひにやありけむ院の御ゑはきさいの宮よりつたはりてあの女御の御
方にもおほくまいるへしないしのかむの君もかやうの御このましさは人にすく
れておかしきさまにとりなしつゝあつめ給その日とさためてにはかなるやうな
れとおかしきさまにはかなうしなして左右の御ゑともまいらせ給ふ女ほうのさ
ふらひにおましよそはせてきたみなみかた　くわかれてさふらふ殿上人は後涼
殿のすのこにをの　く心よせつゝさふらふ左はしたむのはこにすわうの花そく
しきものにはむらさきちのからのにしきうちしきはえひそめのからのきなりわ
らは六人あか色にさくらかさねのかさみあこめはくれなゐにふちかさねのをり
ものなりすかたよういなとなへてならすみゆ右はちむのはこにせむかうのした
つくゑうちしきはあをちのこまのにしきあしゆひのくみ花そくの心はえなとい
まめかしわらはあを色にやなきのかさみ山ふきかさねのあこめきたりみなおま
へにかきたつうへの女坊まへしりへとそうそきわけたりめしありてうちのおと
ゝ権中納言まいり給ふそのひそちの宮もまいり給へりいとよしありておはする
うちにゑをこのみ給へはおとゝのしたにすゝめ給へるやうやあらむこと　くし
きめしにはあらて殿上におはするをおほせことありて御こせむにまいり給ふこ
のはんつかうまつり給いみしうけにかきつくしたるゑともありさらにえさため
やり給はすれいのしきのゑもいにしへの上すとものおもしろき事ともをえらひ
つゝふてとゝこほらすかきなかしたるさまたとへんかたなしとみるにかみゑは
かきりありてやまみつのゆたかなる心はへをえみせつくさぬものなれはたゝふ
てのかさり人の心につくりたてられていまのあさはかなるもむかしのあとはち
なくにきわゝしくあなおもしろとみゆるすちはまさりておほくのあらそひとも
けふは方　くにけふあることもおほかりあさかれいのみさうしをあけて中宮も
おはしませはふかうしろしめしたらむと思ふにおとゝもいというにおほえ給て
所　くのはむとも心もとなきおり　くに時　くさしいらへ給けるほとあらまほ

しさためかねてよにいりぬ左は猶かすひとつあるはてにすまのまきいてきたるに中納言の御心さはきにけりあなたにも心してはてのまきは心ことにすくれたるをえりをきたまへるにかゝるいみしきものゝ上すの心のかきり思ひすましてしつかにかきたまへるはたとふへきかたなしみこよりはしめたてまつりて涙とゝめ給はすそのよに心くるしかなしとおもほしゝほとよりもおははしけむありさま御心におほししことゝもたゝいまのやうにみえところのさまおほつかなきうら　くいそのかくれなくかきあらはしたまへりさうのてにかなの所　くにかきませてまほのくはしき日記にはあらすあはれなるうたなともましれるたくひゆかしたれもこと　くおもほさすさま　くの御ゑのけうこれにみなうつりはてゝあはれにおもしろしよろつみなをしゆつりてひたりかつになりぬ夜あけかたちかくなるほとにものいとあはれにおほされて御かはらけなとまいるついてにむかしの御ものかたりともいてきていはけなきほとよりかくもむに心をいれて侍しにすこしもさえなとつきぬへくや御らんしけむ院のゝたまはせしやうさいかくといふもの世にいとをもくする物なれはにやあらむいたうすゝみぬる人のいのちさいはひとならひぬるはいとかたき物になんしなたかくむまれさらてもひとにおとるましきほとにてあなかちにこのみちなふかくならひそといさめさせ給てほんさいのかた　くのものをしへさせたまいしにつたなき事もなく又とりたてゝこのことゝ心うる事も侍らさりきゑかくことのみなむあやしくはかなきものからいかにしてかは心ゆくはかりかきてみるへきとおもふおり　く侍しをおほえぬやまかつになりてよものうみのふかき心をみしにさらに思よらぬくまなくいたられにしかとふてのゆくかきりありて心よりはことゆかすなむ思ふたまへられしをついてなくて御らむせさすへきならねはかうすき　くしきやうなるのちのきこえやあらむとみこに申給へはなにのさえも心よりはなちてならふへきわさならねとみち　くにものゝしありまねひ所あらむはことのふかさあさゝはしらねとをのつからうつさむにあとありぬへしふてとるみちと五うつことゝそあやしうたましゐのほとみゆるをふかきらうなくみゆるをれもものもさるへきにてかきうつたくひもいてくれといへのこのなかには猶人にぬけぬる人なに事をもこのみえけるとそみえたる院の御せむにてみこたちないしんわういつれかはさまとり　くのさえならはさせ給はさりけむその中にもとりたてたる御心にいれてうたへうけとらせ給へるかひありて文さいをはさるものにていはすさらぬ事の中には琴ひかせ給事なん一のさえにてつきにはよこふえひはさうのことをなむつき　くにならひ給へるとうへもおほしの給はせきよの人しかおも

ひきこえさせたるをゑは猶ふてのついてにすさひさせ給あたことゝこそおもひ
給へしかいとかうまさなきまていにしへのすみかきの上すともあとをくらうな
しつへかめるはかへりてけしからぬわさなりとうちみたれてきこえ給てゑひな
きにや院の御こときこえいてゝみなうちしほれ給ぬ廿日あまりの月さしいてゝ
こなたはまたさやかならねとおほかたのそらおかしきほとなるにふんのつかさ
の御ことめしいてゝわこむ権中納言給はり給ふさはいへと人にまさりてかきた
てたまへりみこ箏の御ことおとゝきんひはは少将の命婦つかうまつるうへ人の
中にすくれたるをめして拍子給はすいみしうおもしろしあけはつるまゝに花の
色も人の御かたちともほのかにみえてとりのさえつるほと心ちゆきめてたきあ
さほらけなりろくともは中宮の御かたより給はすみこは御そ又かさねて給はり
給ふそのころのことにはこのゑのさためをしたまふかのうら　くのまきは中宮
にさふらはせ給へときこえさせ給けれはこれかはしめのこりのまきまきゆかし
からせ給へといまつき　くにときこえさせ給ふうへにも御心ゆかせ給ておほし
めしたるをうれしくみたてまつり給ふはかなきことにつけてもかうもてなしき
こえ給へは権中納言は猶おほえをさるへきにやと心やましうおほさるへかめり
うへの御心さしはもとよりおほしゝみにけれは猶こまやかにおほしめしたるさ
まを人しれすみたてまつりしり給てそたのもしくさりともとおほされけるさる
へきせちゑともにもこの御ときよりとするゑの人のいひつたふへきれいをそへむ
とおほしわたくしさまのかゝるはかなき御あそひもめつらしきすちにせさせ給
ていみしきさかりの御世なりおとゝそ猶つねなきものに世をおほしていますこ
しおとなひおはしますとみたてまつりて猶世をそむきなんとふかくおもほすへ
かめるむかしのためしをみきくにもよはひたらてつかさくらゐたかくのほりよ
にぬけぬる人のなかくえたもたぬわさなりけりこの御世にはみのほとおほえす
きにたりなかころなきになりてしつみたりしうれへにかはりていまゝてもなか
らふるなりいまより後のさかへは猶いのちうしろめたししつかにこもりゐて後
の世のことをつとめかつはよはひをものへんとおもほしてやまさとののとかな
るをしめてみ堂をつくらせ給ひ仏経のいとなみそへてせさせ給ふめるにするゑの
君たちおもふさまにかしつきいたしてみむとおほしめすにそとくすて給はむこ
とはかたけなるいかにおほしをきつるにかといとしりかたし